

平成23年度第2回札幌文化芸術円卓会議の発言要旨

24.3.28 札幌文化芸術円卓会議事務局

1 本日の議題について

【伏島委員長】

今日は、テーマについて議論したい。

事務局で、各委員から御提出のあったテーマをまとめているので、説明していただきたい。

【事務局】

テーマの中に共通していると思われるキーワードとして、「質を高める」、「人材の育成」、「市民の意識を高める」、「子供と教育」、「文化の地場産業化、創造都市」と、第1期（平成21年～22年度）円卓会議の到達点である、文化芸術の産業化というキーワードと結びつけてみた。

産業化は、アート市場の拡大に結びつくのではないかと。そして、それを実現するための要素として、質を高めたり、芸術文化を支える人材、アートマネジメントを担うことのできる人材の育成、市民の意識を高めること、そして、子どもの教育とのかかわり、文化芸術を札幌の地場産業へひいては創造都市へということがあるのではないかと考えてみた。その項目ごとに、各委員のテーマの内容を分類してみたのが、この表だ。

【伏島委員長】

これは、便宜上の整理ととらえていきたい。質を高めて行くためにも、芸術を支える人材が必要であるだろうし、芸術文化を、専門家だけで議論をしても、それだけでは相互作用が生まれないので、市民との相互関係を高めるためにも、市民の意識を高めて行かなければいけない。そして次の世代をつくっていくという意味でも、たえず、大人から子供へ、ある場面では子供から大人へ教え合うことがあるだろう。それが次の世代のベースになるだろう。そういうことをきちんとやっていかないと、第1期の円卓会議で提案された、芸術の産業化ということも、底の浅いことになってしまうのではないかと。各委員からのテーマを整理するだけで少しシナリオ的なものが、今の段階から見えているかなという感じがする。

2 各委員からのテーマについての補足説明

【伏島委員長】

これまでの蓄積を生かして、文化を地産地消するしくみをもっと意識的につくっていかうということだ。中でも、(2)に書いてある、「文化芸術のるつぼ」とは、北1西1に建設を予定している市民交流複合施設を意識している。これはハードだけをつくる仕事ではないわけで、あくまでも、われわれ市民サイドの、そういった市民、アーティストのるつぼがあって、強力なソフトを生み出していかなければいけない。

いろいろな分野の方々が相互に批評し合うことによる再生産も、すごく大事なこと。この辺は意識的に行うと、相当面白いものができてくるのではないかと期待している。

二つ目の観光文化都市さっぽろの理想像は、音楽・美術・デザイン、文芸から舞台芸術、映画、あらゆる都市文化を構成するものを広いポジションから議論しても良いのではないかとということ。

最後に、このような道のりで行ったらよろしいのではというロードマップを市長に差し上げたらよいのではないかとというのが提案の趣旨。

【伊藤委員】

第1期の円卓会議のメッセージをどのように展開するのかに興味がある。

今の一番の問題は、プロ育成とかプロ養成の視点が我々の中に抜け落ちていることだと思う。演劇であっても、写真であっても、オペラであっても、我々が誇れるようなプロを育成し、伸ばしていくシステムが一番重要なのではないかと思う。それは単純に10代、20代の成長期だけの問題ではなく、30代から60代にも言える。世界的に認められている芸術家に対してもサポートシステムがない。その反面、全くの素人とか、思いつきで始めた人であっても、2～3年の間なら助成金をもらうことが、ものすごくやさしいシステムになっている。プロ育成を行うということは、厳しくやるということ。そして産業化が、どうしたら実現するのかということに興味がある。

【斎藤委員】

第1期の円卓会議の産業化と言うキーワードを検証して、それを具体的に引き継いで、具体化することを考える1年間になるのではないか。

アーティストは市民であるし、市民もアーティストになり得る、それが人材育成とか意識を高めるということにつながると思う。

ある水準の視点をもった、客観視出来る指導できる立場の人が、演劇の世

界だけでいうとまだまだ必要だなと思っている。そういう視点の人を道外から招きながら、外にも目を向ける。どうしても大きな市場は東京だ。東京というマーケット、関西というマーケットをもっと意識すること。アジアというマーケットも意識してアートを考えるということが必要ではないか。産業化するには市場が必要だ。ゆくゆくは、東京の人が札幌まで僕の演劇を見に来るということになってくると、道内のマーケットも潤う。

【田中委員】

演劇が一番大好きなので、演劇のことについて言う。札幌の演劇は、ばらつきがある。それを余りはずれがないようにする。各分野の質の議論は非常に大事なこと。これから札幌市がアジアの中国、韓国、台湾から観光客を巻き込んで、文化的な施設ならびに質の向上に取り組んでいく。IT が全てを支配しているような世の中であって、特定の時間に特定の場所でしか見られない演劇は、非常に価値がある。将来的には海外からアジアの方々が来たときに、その演劇や各分野の文化的なものも巻き込んで、観光が成り立っていったらすごいのではないかと思う。

【野田委員】

第1期報告書のあたらしい概観図で、市民と行政とアーティストが矢印で三角形に繋がっていた図があったと思うが、それを少しでも実現できるような方向で話していきたい。

まず一つが市民の文化的参加ということ。今全く興味が無い人を、足を運ぶようにするまでに興味を持たせるという事はすごく難しいことだと思うのだが、円卓会議には、いろいろなジャンルの方が集まっているので、いろいろ話せるのではないかと思った。

次に、質の向上のためには、もっと権威化されたものがあるといいのかなと思った。例えば、札幌市お墨付きというような芸術分野があって、それを目指して別の団体がそれをもらえるように頑張ったり、そんなものいらないという方向で競っていくと、現場が活発になって、質の向上につながっていくと思う。

【本家委員】

一番に考えていたのが、コーディネーターの育成と雇用。例えば、地域でアーティストを呼びたいときに、直接アーティストと連絡を取るのは、大変で、どこに連絡していいのかわからないと思う。コーディネーターが入ると連絡しやすいし、こちらの準備もしやすくなる。

また、広報の仕方だが、観光文化ステーションにはパンフレットが置いてあるが、例えば、ただパンフレットを置くだけではなく、音の出る展示のように、毎日通勤のたびに自然に耳に入ってきて、興味を持ってもらう方法などを考えて、観光客だけではなく、むしろ札幌市民に興味を持ってもらいたい。

【井出委員】

オペラの分野で19年間研修団体を続けてきた中で、いろいろ感じたことを書いた。

アーティストも観客も育っていくというシステムが、育てて欲しいということで、19年間、オペラの分野で研修団体を続けてきた。今、若い人、アーティストを育てる方向性を考えなくてはならないところまでできていると思う。

演奏者、演技者を育てる中で、何が必要かということ。例えば、アウトリーチでは、老健施設であったり病院であったり、色々な所に行って演奏する中で、人との交わりの中で、何をなすべきかというミッションを考える、そういうシステムを考えなければならない。

アートマネジメントというシステムが札幌にはなかなかないので、それを続けて行こうとする人たちがなかなか育たない。そういう裏を支える人があってこそ、はじめてホールなりハードが生きてくると思う。今そういうシステムを考えなければならないのかなと感じている。

【荒川委員】

文化芸術意識調査報告書で、各分野で興味を感じるという人は20%だったり30%だったり、低かった。それを見て感じたことは、札幌市民の文化意識を高めるにはどうしたら良いかということ。アーティストを含め、各分野の芸術文化は、ファンが支えている。それを何とか増やすためにはどうすればよいか。アーティストや市の立場で出来ることは何かを考えて行きたい。

それとともに、市民の意識を高める上で問題もたくさんあると思う。太鼓なので、村祭り、町の文化祭にも呼ばれるが、そういうところでは、太鼓、邦楽に限らずダンスでも歌でも人は集まる。

札幌ではなかなか満杯となることが少ない。それはどういうところに問題があるのか。

また、大通公園での盆踊の太鼓など、どうしても騒音の問題がある。このように、何かを発信しよう、大きなイベントをやろうと言っても、音の問題があったり、興味のない人からは、なんだこんなものという批判も起きてく

る。そういういろいろな問題を抽出して、この会議の中で解決できるものがあれば意見をまとめていきたい。

【浅野】

産業化のために、どうしたらよいか。札幌のアートをもっと身近に、世界に発信するのが一番大事だと考えている。それが究極的には札幌の文化を築くことだと思っている。そのためには、アート市場の拡大が大事で、買う人と売る人の意識を上げていくことが必要ではないか。そのために質を高めて行く努力をする上で、学芸員やアートディレクターを養成して、質をきっちりと判断できる人を養成し、つないでいくことができるコーディネーターを養成していく。それと合わせて、アート教育、子供たちが大事であって、次の世代へ向けて、きっちりと教育していくべき。そのために札幌市に数多くある箱モノをきっちりと評価して、次の世代へ渡していく。

3 意見交換

【伏島委員長】

みなさんの関心は、絞られてくるのではないか。

質をたかめること。本当のアーティストの質の向上の問題がある。それと、コーディネーターする人がいない。

それとマーケットの議論がある。マーケットとアーティストをつないでいく。もちろんマーケットには、札幌市という議論もあれば、札幌市から世界をつなぐ、そして市民とアーティストをつなぐ、ただ単純に結びつけるだけではなく、プロデューサー的な、あるいは、もっと細かいディレクター的な、要するに、アーティストそのものではないのだが、結びつけたり、方向付けをしたり、支えたり、金を集めたり、いろんなお世話をする、いってみれば世話役だ。そういう幹事役世話役のような人の質も高めて行かなければいけないということがあったと思う。

それと、絶えず出てくるのは、子どもという言葉。

質のこと、マーケットのこと、それと子供。マーケットの議論は当然産業化に不可欠な話だ。

こんなことが、議論したいとおっしゃったことだと思う。

【伊藤委員】

忘れてはいけないのは、今まで行われてきた文化的事業自体の質もある。

広報やイベントの一番の問題は、現場の声が出ていないということ。行政

などはたいがい善意で予算をつける。ただそれを使う段階で、丸投げしてしまう。その結果、業者さん、広告代理店に落ちて、現場には金が落ちない。結局ちゃんと実施はしているし、お金も使ってやるのだけれど、それがかゆいところに手が届かない。

つねに、マーケットの話でも、子どもの話でも、人材育成の話でも、その中のひとつひとつのプログラム自体の質の問題は避けられない。

【伏島委員長】

広報といったときの仕事の質、広報も含めての仕事の質だ。丸投げになってしまっている。チラシをつくった。まいた。その後どうするか、みんな悩んでいると思う。

【伊藤委員】

もう一つ質のことで、さきほど荒川委員のおっしゃった音のことを言うと、とても難しい問題だが、それは結局みえない規制がどんどんできていくということだ。

大通公園は僕らが子供の時は、仮装行列をやっていた。要するに、札幌市がやっている盆踊の連合会の総仕上げを大通りでやっていた。それを札幌市の住民が見に来ていた。うるさいからやめろというと、今まで積み上げたものが失われる。それは質の問題のような気がする。

【斎藤委員】

今のお話は、地域コミュニティの問題のような気もする。お祭りというものが、地域コミュニティの中で、全員で支えるものではなくなっている。芸術文化の円卓会議でそこを話すべきか。地域コミュニティの大切さは、確かに文化芸術も担うのだが、規制と考えたときに僕らの専門外という気もして、議論のつかみどころがなくなってしまうのではないか。もう少し絞った方がよいのではないか。

【伏島委員長】

個別具体的な問題はいろいろある。まさに、コミュニティの問題。これを解決しようとするすると相当な民主主義が必要になってくる。

【斎藤委員】

マーケットの話をしているときに、札幌市は、北海道の中で政令指定都市であるという特殊性がある。その街が持つ責任もあるし利点もあると思う。

全道の人口は何十年も変わっていないのに、札幌だけ倍近く増えている。全道の優秀な人材、素材が札幌に来ている。その人たちからアーティストも出てくるし、市民となっていく。札幌市は、政令市であるというミッションを帯びている。責任もあるし利点もあるのだということを、腹の底に持つておくべき。

【伏島委員長】

札幌市のミッションがあるはずだ。人材供給先としてもお互いにそうなのだが、全道の市町村と、ものすごく関係がある。ミッションを議論することは札幌にとってプラスになる。

【斎藤委員】

ただ、そのことでがんじがらめになってもつまらないので、自由に考えたいところはある。

【伏島委員長】

野田さん、今の若者は、どういうアートを面白がっているか。

【野田委員】

大学の友達には、自分が関心のある展覧会、美術だ。理系なら美術よりも博物館が好きということもあるが、有名なものには集まるというのが、実感だ。サブカルチャーと言われるものにも一定の関心を持っていると思う。

【伏島委員長】

そういう若い人に、マーケットにおける強力な市民になってもらうにはどうしたらよいか。

【田中委員】

最近の演劇を観に行くと、劇場にはけっこう観に来ている若者が多い。若者だけの、エネルギーで、それだけ売り物にしている劇団もある。それはそれでいい。中味が足りなかったとしても、そのパワーたるものすごいものがある。けっして中高年だけではなく、文化的な意識は深く静かに潜行しているのかなと最近すごく思っている。

【井出委員】

オペラの世界も高齢化しているというのががあるが、さっぽろオペラ祭が札

幌市芸術文化財団で行って7年間続いているのだが、ここ3年ほど、ワンコインオペラを学生に提供したところ、結構来る。決して若者たちが離れて行くとは思わない。ただそれを提供する私たちがどのような工夫をしたらよいのかということ。収入にはならないが、やはり若い人たちに見ていただかないと未来がないので、まずワンコインオペラを続けて行こうと思っている。

それと、昨年のオペラ祭で「ヘンゼルとグレーテル」を上演したのだが、小学生にも見せたいので、収入はないが、会場に来ていただくために、いろいろな小学校に出向いて、ミニコンサートを行った。その結果、教育文化会館で行った本公演にも、子供たちが、かなりお母さんと一緒にきてくれた。そういうことを考えながら運営していかなければならないと思う。

また、お客さんが入ればよいのではなく、お客さんを育てることも大事だ。ちゃんとした目、耳をもつ市民がいなければ、芸術は育たないということかなと感じている。

【伏島委員長】

若い人がやっている演劇もそうだ。例えば「BLOCH」というところがあるのだが、ここは利用料金が安いこともあって、演劇を始めて数年の人がやるところで、おじさんおばさんはほとんど来ない。だいたい内輪的だ。若い人の芝居には、若い人しか集まらない。お互いに凶々しく間口を広げて行くというか。アウトリーチも必要だと思う。

今、子どもを育てる、御客を育てるという話があったが、浅野さん、東川町は写真の町として世界的に尊敬を受けているが、最初から写真の町ではなく、ものすごい苦勞をしている。例えば、市民がカメラを持つということは、ほとんどなかったということだが。

【浅野】

最初の10年は、なんでこんなことをやっているのかと言われ続けてきた。町の人にとっては、アートとしての写真に対する関心がまるっきりなかった。そのお金があったら、保育所を建てた方が良く、橋を造った方が良く。道路を造った方が良く、ということがずっと言われ続けてきた。それが変わった契機となったのが、写真甲子園という企画だった。写真甲子園によって、全国各地から高校生が集まって来た。高校生がカメラを持って町のあちこちで写真を撮るようになり、町の人たちと写真のきっかけが出始めて、ようやく、ここ2~3年、普通に町の人が「国際写真フェスティバル」を見に来てくれるようになった。行政がやることは、批判を強く受ける。お金を使うことに対して、市民の方が満足できるというのは並大抵ではないと感じた。

当初の部分では、企画の部分で特定の業者の方が関わって来たが、現在は、町の人たちが、実行委員として企画を行っていて、業者さんが入っていない。そのため、非常に流れが良くなったし、町の人に関われるようになった。そういった意味では、質の問題では、イベント業者に丸投げで行うのではなくて、積極的に町の人たちが関われるシステムを作るのがよいのかもしれない。

【伏島委員長】

今のお話は深い。札幌は大きな街なので、つい予算をつけて投げてしまう。東川は小さな町だから、うらやましいと思う。札幌市民だとどうしても手触り感がなく、自分が直接関わることも余りない。その意味で、コミュニティは捨てきれないキーワードの一つではある。

質の問題にもどるが、TPS という北海道演劇財団の附属劇団は、これまで斎藤さんが一人で仕切って来たのを、お互い切磋琢磨しなければだめだろうということで、斎藤さんは、チーフディレクターという立場になって、30代の若い演出家の男3人、女1人を入れてやろうとしている。ちょっとその辺のところを話して欲しい。

【斎藤委員】

北海道演劇財団ができたときに、演劇創造集団として、何かを作る団体が必要だろうということになった。TPS という名前は、「Theater project sapporo」の略だ。当初は東京から、それこそクラーク先生のように、MODE という劇団の松本修さんを常任演出家として招いていた。僕は当時札幌市民だったので、市民の俳優の一人として参加していた。年に一本の演劇作品を、市内の劇団から俳優をピックアップして作って、解散している集団だった。基本的に東京などから演出家を招いて、資金面では、札幌市からも北海道庁からも助成を北海道演劇財団はいただいているが、大きなところは、文化庁からの支援で運営していた。

俳優の養成所も作った。養成所から第一期卒業生が出た時に、その受け入れ先が必要だということ。あと、その都度人を集めて解散しているのでは、ノウハウとか力量の蓄積がなくなる。やっぱり劇団化することが必要だろうということで、2001年に、北海道演劇財団附属劇団ということでTPSを劇団化した。そのときから、チーフディレクターということで僕が演出家を務めている。今、座員が11人くらいいて、できればプロを目指す劇団を作るという話をしていたが、なかなか全員に、それだけで生活できるだけのギャラは支払っていない。

最初は3年という約束でやって、もう一期といわれて4年やって、さらに

4年といわれて、もう僕がやり続けるべきではないと思っていたのだが、僕より10歳若い、ある覚悟ができた世代がようやく4、5人現れてきた。北海道演劇財団の附属劇団としてのミッションも、年々重くなっている。作品の本数も多くなっている。とても僕一人ではかかえきれないということで、4人を4年位前から一人ずつ呼んで、協働作業をいろいろな作品でやりはじめた。協働作業をする中で、僕がここでやってきたミッションの質みたいなものが、ほぼ伝わったのではないかと。手触りが伝わったのではないかと。この春から一応僕はチーフディレクターとしていきなり辞めるのではなく、一応全ての作品の責任は取る。僕も一年に一本か、2年に一本は作品を作るのだが、実際にそれぞれに作品を演出してもらい、基本的に彼らの作品をTPS作品としてどんどん作っていきこうということになった。

しかも、僕が11年やった結果、TPSというものがしっかり色づけされてしまった。斎藤歩の個人劇団のように思われているところがあって、札幌の中核創造集団としてのパブリックなミッションをそのまま果たすのはしんどくなってきている。そこで、TPSを解体し、僕はチーフディレクターで今のTPSの劇団員も、ほぼ全員が新しい座組に入ることになったのだが、「札幌座」という名前に変える。劇団という言葉は使わなかった。今の日本で劇団員ですというとはかにされる世界がある。貧乏して苦しいが、若いうちだけは頑張る世界だ。劇団ということばが、この国がつくってきた歴史の中で手あかにまみれてしまっている。欧米で「theater company」というと、劇団ともイメージが違って、機能としては劇場だ。ただし、日本で劇場というと、もう小屋、ハコのことだ。適当な言葉がないかなと考えた時に、次の創造集団の形を一緒に考えてくださった、テレビ局や設計事務所の社長とか、福祉関係の財団の方等が、真剣に議論してくださっている姿を見たときに、「座」という言葉が相応しいと思った。文学座とか、俳優座とか、「座」という名前の劇団が既に日本にあるが、商工業者の集まりのことをそもそも「座」とよんだらしい。そういう人たちが集まって、芸能のこと、ここで行われる舞台芸術のことを考えてくれているので、「座」という言葉がふさわしいと思った。それと、今まで僕のやっている演劇は、裏町にひっそりと咲かせているようなことが多かったのだが、パブリックな使命を帯びているという以上、札幌の街の真ん中に正々堂々と演劇を立てる必要がある。それで、「札幌座」という名前にこの春から変わるということになった。

15年から20年こういうことをやっているのだが、ここで芝居を続けるのだと腹をくくってから20年。僕より10歳若い世代が4人できたということは、あと10年たつと、それぞれの下に4人できると16人になる。そのころには何人か食えているという気がしている。僕らは、いろいろな方か

ら支援を受けた結果20年続けられている。

そこで、僕がちょっと足りないなと思っているのは、こうして作っていると、この街の中だけで考えがちなので、誰か呼んでこようと思っても、当初東京から演出家を呼んできた予算が、今どこにもない。文化庁の助成の中にもなかなかない。こっちが向うへ出品する予算もなかなか出てこない。

行政からの支援というのではなく、何か違うしくみがつくれなかなということ、この議論の中からアイデアが出てこないかなということ、こういう話をした。

【伏島委員長】

学び合いがないと進歩がないので、今日は斎藤さんにトップバッターで行ってもらった。

井出さんに、オペラ祭のことをききたい。

【井出委員】

札幌の中でいろいろな団体が共通性やネットワークは全くない中で、個々にやってきたのだが、1カ月に1回集まってどういことをしようかと話し合う中で、お互い何をしたいのかも見えてくるし、お客様に何を提供したら良いのか、観客のことを考えるようにもなってくる。その中でマーケティングをどうしたらよいかということも考えるようになってきた。その中で、Kitaraが、今年の7月1日に、バースデーコンサートで、「コジファントウツテ」をやることになった。その出演歌手の決めるときに、地元の人を選出するのではなく、オーディションをすると全く予想もしなかった人たちが選ばれた。その中に北海道教育大学の学生がいた。若い人たちにそのような場が与えられることによって、すごく生き生きと取り組んでいる。質としてどのくらいのレベルまでいくか分からないが、絶対彼女たち、彼氏たちには未来があると思うし、札幌にとっても未来があると思う。

ひょっとしたら、さっぽろオペラ祭ということで、いろいろな活動によってオペラが認められたことで、Kitaraのオペラに発展したのかなと思う。私としては、北海道には札幌室内歌劇場と北海道二期会というプロの団体があるので、逆に研修団体を続けようとも今でも思っている。研修する場があって次のステップがある。観客の拡大にもつながっている。自分たちが手売りをしなくても、プレイガイドで、微々たるものではあるが、私たちにとっては考えられないほどの売券が動くようになった。それはさっぽろオペラ祭があったおかげかなと思う。年々金銭的には大変になってきているが、やってよかったと思う。

【伏島委員長】

頑張って拡大してきた。でも札幌市全体からみればまだまだ知られていない。ファインアートの世界でも、ダンスの世界でも、写真でも、みんな共通している。その辺りが、見えてきていないというところが問題だ。

今日は、とても良いお話しをうかがっている。しかし、それを意識的に交流する場がない。議論を交流する場があるようでない。

ただ単純にアートをつくるだけではなくて、お互いに、ここまで熟成してきたがこのような課題がある。そういうことを情報交流して、批評しあって、あたらしいものを出すような、そういうことが以外と少ない。それならある程度システム化していかなければいけないのではないか。それは、個人や一団体ではできないので、それこそまさに自治体の一つの義務ではないかと思う。それが、今札幌市で検討しているアートセンターではないか。

【田中委員】

違う視点だが、質の向上というと、アーティストの質もちろん大切だが、マーケットもすごく大切だと思う。9カ月前に、関東から引っ越してきて、一番感じたのは、北海道は特殊だということ。雪がある。だから、すごく儲かるときと、儲からないときが両極端に思える。

劇場に足を運ぶときも車で移動しなければならないという不便さがある。料金も同じでなくてもよいのではないか。人がたくさん入るときは高くてもよいが、人が入らないときに来て欲しいのだから、もっと安くてもよいのではないか。

それと同時に広報の仕方だが、今はIT時代で、どんなことでもクリックひとつで分かる。そうすると、ただ単に文字が羅列されているだけでは心は動かない。そこには、何か心に響く言葉が大事だ。そういうことを広報の方たちも考えて行ったら、全然集客が違うのではないか。

これだけ観光客を誘致している札幌市なのだから、やはり観光と一体化するような形で、東南アジアの人たちにもこんなに良いものがあるよと、中国語、韓国語、台湾語版くらいは作る。私は、札幌で行っている芸術文化は産業化とマッチするような気がする。これだけ良いものを作ろうとみんなで頑張っているのだし、東京等と多少の差はあるにしても、オーケストラにしても、演劇にしても、ミュージカルにしても、すごくいいものやっているなと思う事が多い。だからそれをもっと観光客の人にも知らしめたい。それと同時に土産を一杯買ってもらうというところに結び付けたい。

【斎藤委員】

ちょうど先月終わった、「札幌演劇シーズン冬」のチラシを読んではいたら、さっぽろ雪まつり協賛企画と書いてあった。それで、そう多くはないが、相当数の道外のお客さんも来ていた。

【井出委員】

ミュンヘンクリスマス市のときに、「ヘンゼルとグレーテル」を行った。これは協賛企画ではなかったのだが、ドイツ人が来ていた。

【田中委員】

観光と文化がコラボすべきだ。もうちょっと、札幌市にお金が落ちるように組み込んでいくべき。これだけ良いものがあるのだから。

【伊藤委員】

基本的な質問をしたい。「札幌座」をこれから立ち上げて行くときに、経済的には、いろいろな助成金もあるだろうが、何がメインになるのか。

【斎藤委員】

補助金だ。最終的な目標は、文化庁等からの補助金と観客からのチケット収入がうまく拮抗すると良いと思う。ただ、札幌座の劇場（シアターZOO）はものすごく小さな劇場なので、そこに、俳優・スタッフの人件費を入れると、観客からチケット代として一万元以上とらないと採算が取れない。なんとか3千円くらいに抑えようと考えたら、補助金のほうが収入としては大きくなる。

【伊藤委員】

座付きの人がもらっている収入はどのくらいか。

【斎藤委員】

一番出演が多かった30歳くらいの俳優が、この一年間に北海道演劇財団から得た収入は、100万円を切るくらいだと思う。なので、彼は、稽古時間以外で出来るアルバイトをしている。

【伊藤委員】

余り、画家と変わらない。

例えば、札幌交響楽団は独立採算で行っているのか。演奏者の月給はどの

程度か、10万円以下か。

【事務局】

札幌市から1億6千万円助成している。道から1億円程度。ただ事業規模は9億円程度だと思う。給料は、所帯をもって生活できる程度だ。

【伊藤委員】

なぜ、演劇やっているひとたちと、そのような差ができたのか。なぜ札幌にお金がついて、演劇にお金につかないのか。どのような基準で線を引いているのか。

【事務局】

線を引いているわけでもないし、基準があるわけでもないと思うが、札幌そのものは昭和37年に、確か民間から1500万円をいったん札幌市へ寄付をして、それを札幌市から札幌へ助成する、つまり、民間の方々が札幌の交響楽団を育てようと言うことで育ってきた楽団だ。今や札幌市民にとって、札幌の文化を語れるという象徴的な存在になっていると思う。1億6千万円の助成金を出すことが、議会を含めて大方の理解を得られている、もうだいたい認知されているということだと思う。

演劇も、まさに札幌演劇シーズンを契機として、昭和37年の時期にあるのかもしれないと思う。

さきほど、太鼓が大通公園でうるさいと言われるという話があったが、サッポロシティジャズもそうだが、やはりそれは、どこか十分な市民権を得られていないということではないか。もっともっと長い間かかって、それが市民の生活の中に根付いた絶対的な存在になれば、多少うるさいといわれようと、それを凌駕するような札幌市民の文化的な意識があると言えるようになる。そういうような時代が来ていいはずだと思う。そのためにはやはり、芸術文化が、さきほどから議論となっている産業のなかに、あるいは、明らかに観光客が来て、これが札幌にとってすごいメリットとなるだとか、具体的な何かに組み込まれるような位置づけになっていかないと、もうワンステップ行かないのかなと言う気がする。

【伊藤委員】

なんとなく流れが理解できたが、札幌やPMFにある程度予算をつけてやることは分かるのだが、要するに、既得権じゃないけれども、古いものほど大切にされていくというところがある。欧米の例でいうと、新しいものはよく

分からなくて認知させるのが難しいわけだから、ある一定期間は、どういう風に補助をするか、どういう風にバックアップするかが問題となる。

さらに、質と助成金の点で言うと、本来は、新しいものだからこそ、専門的な知見をもって、かなり信念を持ってやっている人に対して最初サポートして、5年や6年たっても、やっぱりこれはどうにもならない、かなりいいかげんなものだということがよく分かったときには、自助努力でやってくださいということが良いと思う。そこがうまくいっていない気がするのだが。

【事務局】

行政マンはみんな異動するので、いまおっしゃったような高度な見極め、長い視点でものを見てというのは、市役所の人間は苦手で、美術館の学芸員のように最先端のものを見極めるのは不得手だ。そこで、今の補助システムの中に、そういった方々の意見が組み込まれるようなことになれば、その辺の視点での判断が出てくるかもしれない。

市の税金を運用する場合には、恣意的な判断だと言われかねないので、なかなか難しいかもしれない。

【伏島委員長】

質、産業化ともからんで、自立へ向けた支援のあり方もどこかできちんと議論していかなければいけないと思う。またかなり自立したところには、新しいミッションが生じると思う。

さきほど田中委員が言っていたが、我々が楽しむだけではなくて、北海道民、中国や台湾や、アメリカやヨーロッパの人を含めて、国際観光の中で札幌の文化を楽しんでいただくと思うなら、それへ向けて、美術も、音楽も、演劇も同じようにミッションをかかえて、同じようにやることはないと思う。

それはやはり実力のあるところから、雁行的な発展が必要である。札幌とPMFは先に飛ぶミッションを負っていると思う。そのことは彼らも分かっているが、なかなか予算がなくて動けないところもある。しかし札幌とPMFには、先に飛ぶというミッションを明確に意識していただいて、滞在する国際観光客の札幌の楽しみ方のひとつとしての大きなパーツになってもらわないと困る。それを、彼らのミッションとして投げかけて行く。

その後で何が続くだろうか、演劇には良い意味で光があたってきた。北大にもいっぱい留学生がいるので、彼ら彼女たちにも応援してもらって、国際的なサービスを付加することには、そんなに膨大なコストはかからない。そんなことも意識しながら、自立に向けた支援と同時に新しいミッションを意識していただいて、札幌市ひいては札幌市民のために働いてもらう文化とい

うこともあると思う。

美術関係はどうか。上海の美術市場は活発だと聞く。それは、お金があるというだけではなく、上海の人たちのニーズに、ボールを投げたアーティストもいっぱいいるし、コーディネートする人もいっぱいいる。だからマーケットが動く。

【伊藤委員】

美術に関しては、ここ10年くらい粘り強くやってきて、ある程度、いろいろなことが形になって見えるようになってきた。

それで、わざわざ海外から見に来るようなレベルの作家がいるのかというと、なかなかニューヨークや上海のようにはいかないという現状がある。このことは、若手も年寄りも含めて、質を上げるといことなのだが、わざわざそれを見に来るほどのものを作ることは難しい。それを創っていくときのシステムに関して言うと、補助の話は全くそのとおりで、いろいろなことを採択するときに、恣意的に動かれては困ると、当然我々も思う。ただ、ある程度恣意的でないとい人は育たない。100万円を10人にばらまくよりも、ディレクターが、こいつは才能があるから、こいつはなかなかアピールしそうだからと、100万円を投入した方がよい。それで失敗することもある。しかしその決定は、ディレクターの恣意ではなくて見識、見立てだ。ただそれが芸事の場合、うまくいくこともあるしうまくいかないこともあるので、それは含んでおく。そのときに、なぜこの人を選んでうまくいったのか、失敗したのかということについて、説明ができるかどうかということだ。だから、海外の美術の助成金でも、全部、ジャッジが載っている。誰がそうしたのか。なぜこの人を選んだのかということが、そのジャッジの実績となって、助成金の成果として問われるので公開している。

だから、意外に予算が少なく強引に決めているのだが、結果がでてしまうと周りもそれ以上何も言えない。失敗したら止めればよいという話だ。

【伏島委員長】

3年くらいで文化部の職員は変わってしまう。どこの部局も同じ。そうすると、職員は専門家になりようがない。その方たちに、例えば助成のことまで投げている市民の我々も悪い。責任感がない。批判ばかりするのはたまらない。そこで、北1西1に複合施設ができて、そこにアートセンター的なものができたら、そこに市が関係している助成システムの全部かどうかは分からないが、見立てに関する部分は外部化してしまう。そのかわり、任されたところはオープンにして、こういう理由で、この人に100万円補助したとか、

補助した結果がどうなったのか、検証もする。

外部化された、見立てを任された者たちが、助成を決めることから結果まで検証して、それをオープンな形で市民に返す。それは見立てを任された者たちが試されることになる。恣意的すぎると言われることもあるかもしれない。しかしそれをやっていかないと、潤沢な予算などないのだからうまくいかない。札幌が、それを先駆的にやったら、それだけでもアウトプットとして、すごく大きいと思う。

【事務局】

恣意的でなければ育たないというのは、確かにそうだと思うが、難しいのは、行政は公平性を求められるということだ。市民が納得する合理的な理由付けが必要だ。

【伊藤委員】

一番分かりやすいのは計量化するということしかない。なぜこれを選んだかということ、細かく点数化する。

入試の合否でも、昔は芸事の世界なので、のびしろがあるのか、これで精一杯なのかは見れば分かるからそれで決めていたのだが、親御さんから、「それは先生が好きだけでしょ」と言われる。好きなだけではなくて、見れば分かるということ、なかなか伝えづらくなってきている。しかし説明責任がでてきたので、それを細かく、例えば音楽であれば、音感が10点満点だろうとか、将来性を見逃すとまずいので難しいのだが、やはり判断内容を、細かく翻訳していくということだろう。

【事務局】

公平性も問題だが、他のアーティストはどうするのか。まだ知られていないがすごく有望な人がいるかもしれない。つぶすことになるかもしれない。そこをどうするのかという問題もある。

【伊藤委員】

例えば美術館で、可能性を感じるからという理由で、企画展に新人を使う場合があるが、実は一番まずいことだ。

プロの世界なので、可能性があるといいながらも、ある一定の経験や、プロとして訓練されているかを、ある程度証明した中で可能性があるということなので、やみくもに可能性で使うと、学芸員の好き嫌いになってしまうからまずい。

そこで問題なのは、何を持ってプロフェッショナルな若手なのかを証明するのかということだ。

そのシステムは、行政がお金を出すときには、行政がつくらなければだめだ。よく出る事例では、ニューヨーク市で芸術家に免許をだしている。その免許の要件は、美術関係の大学を卒業しても、独学でもよいので、3年から5年間コンスタントに、援助が無くても活動していること。

活動を続けている前提がないと、助成金にエントリーもさせてもらえない。学生はいっさいだめで、社会人になってから3年から5年生き延びなければいけない。そのような免許をニューヨーク市が交付していた。

そもそも、免許制度を始めた理由は、居住制限の規制緩和だった。

今はもう観光地となって、アーティストが住めなくなったが、かつてソーホーだとかチェルシーだとかにあったつぶれた工場などを、芸術家が、アトリエにしたいとか、稽古場にしたいと思っても、そこは商業地域なので人は住めなかった。そこで、ニューヨーク市が、特例で、短期間アーティストならそこをアトリエ兼簡単な住居にしてもよいという規制緩和をやった。その際、やみくもに不動産屋が入ってきては困るので、アーティストとそうでない人とを分けるために免許を出すことにした。

つまり、文化の方ではなくて、産業の方でしょうがなく作った制度を、文化の方で使って、助成金を申込むときの入口にしているようだ。

行政が、助成金を出すための芸術家の定義は、優れた芸術家でなくても良いのだから、おそらく役所でやればよいと思う。そのうえで、業績を数値化することが必要かもしれない。

【伏島委員長】

この辺の具体的な話は、かなり込み入った話になるし、いろいろな事例を含めた研究会的なところでやっていかないとならない。

仮にアートセンターができるとしても、まだ時間があるので、別途きちんと勉強していく話かなと思う。

【井出委員】

もうすでに、アーティストバンクはスタートしているが。

【伏島委員長】

これは、リストアップする基準はあるのか。

【事務局】

これは、実験なので、音楽の方にジャンルを限った。それと、ある程度クオリティが必要ということで、いくつかの団体に協力してもらい、札幌市の関連事業に参加した方等の中から、270人位の方に参加の依頼を出し、これに応じてくれた方が今、60人くらいいる。

これから登録分野も、音楽だけではなく、演劇、美術、写真等にも広げて行く。今は情報提供だけ行っている。

実は、間にコーディネートの問題がある。本家委員からあったように、場に応じたアーティストを紹介するというようなコーディネートが必要なことは、ほぼ分かっているのだが、今、それを役所が行うことは非常に難しいので、とりあえず直接交渉してもらおうことにしている。

【井出委員】

難しいところだ。

【斎藤委員】

札幌市内で2千人くらい演劇人がいると言われているが、アーティストはだれなのかを線引きしろと言われたとき、ものすごく難しい、この国では。

音楽なら、音楽大学を出たとか、コンクールに出た人だからという線引きがあるが、演劇では、その辺りを歩いていたやつがある日突然役者となる。それが演出によってはものすごく面白くなったりする。それぞれのジャンルにいろいろなことがあるけれども、継続して何年こいつは舞台に立っているとか、実際それをやり続ける覚悟が見えた段階で、僕はそいつをプロと呼ぶとか、それぞれのジャンルで線引きをこっちも考えなければいけないという責任を最近考える。

【井出委員】

アウトリーチは難しいと思う。行って歌えばそれでよいというものではない。いろいろなところに行ってみてそれを感じた。最初はものを知らないで行って、歌っていれば喜んでもらえる、涙も流してもらえる。でもそれではいけない。高齢者、病人、ニーズがそれぞれ違うと思う。演奏する側も、それを分かった上で行くという認識を持たなければならない。

【荒川】

北海道庁で「赤レンガアーティスト」というのをやっているが、僕もそこに参加していて、去年までネットワークの代表だった。赤レンガアーティストの課題が、ホームページを見ているのが、ほとんど広告代理店とかイベン

ト会社だということ。ギャラについて掲載するのはどうかなと思う。

【事務局】

けっして、ただでお願いするためのアーティストバンクではなく、ビジネスに繋がればよいと思っている。各アーティストの出演料の記載は、ほとんどは「応相談」で、金額は出ていないのだが、だいたいの目安があれば、頼みやすいかなと思って掲載してみた。

【荒川】

札幌市からのお墨付きになるので、そういうことも問題なのかなと思う。

【伏島委員長】

この問題は、難しい。アートだけではない。私は、北海道のアウトドア資格システムの最初の基本設計をした。そのときに、これは、道庁から OK された、資格をもらったとしても、ただちにプロということではない。あくまでも出発点だと言った。しかし、資格を取ったら、おれはプロだという人もいるし、資格を取っても全然仕事がこないと怒る人もいる。

そういう人を含めて、システムがはじまると、でこぼこはあるが、市場からも強制されるし、制度を変えようという動きも出てきて、今では次の世代が制度を新しくしている。そうやっていくので、「アーティストバンク」も、今まさに試行というところなのだろう。

芸術家への助成を誰がどうやって決めて行くか、芸術家の資格というようなことが今日ずいぶん議論になっているが、ある程度、自治体の中に囲い込む部分と外部化していく部分があるはずなので、どういう按配で制度設計していくか、そういうことも視野に入れて、じゃあ本当のプロとは何か、彼らを自立へ向けた支援はどうあるべきかとか、少し糸口については議論できたかなと思う。

今までの議論を聞いていて、どう思ったかという事もすごく大事だ。

【本家委員】

今、いろいろな意見を聞いていて思いついたのだが、広報で一番大事なものは口コミではないかということ。結局はネットの情報よりも、口コミだと思う。行ってみておもしろければ、友達に行ってみないか声をかけることもできる。結局最後はコミュニティの問題になってくるのかもしれない。一番は口コミだと思った。

【伏島委員長】

口コミを活発にするしかけとか。

私もそれで、ちいさなカフェを始めた。

パリやウィーンなら、まさにカフェが口コミの場でもあるし、批評の場でもある。新しい才能が発見される場でもある。

アートセンターみたいな公的なものがあるって、かつ民間の、飲屋さんも含めたそういうようなところがあるのが都市なんだと思う。

【田中委員】

口コミということで私が感じているのは、何かお買い得があるかどうかとうことだ。お買い得という部分で意外と動く。同じ料金でも付加価値があると動く。お買い得が大事なんじゃないかと思う。

【伏島委員長】

それが伝わってくるかどうかで大分違う。

写真が大好きで、今日もいくつか見てきたが、本当にピンからキリで、その辺の批評というか口コミというか、それがあると我々も、もっと札幌を楽しめるといふことがある。札幌市内の写真のギャラリーをご覧になってどう思うか。

【浅野】

結局写真の場合も、自分で写真家だと言うと、写真家になるというところがある。いわゆる商業写真家とアーティストがいる。うかがいながら、その辺の区別も難しいなと思っていた。

さきほど、海外と雪まつりの話がでていたが、雪まつりで海外から人がいっぱいきている時期に、何もしないということはない。これをうまく使いながらやっていくことが大切だ。

【田中委員】

海外の人たちの動向を調べるのが大事だと思う。中国人と韓国人と台湾人では、食べ物も違うし考え方も違う。だから、やはり彼らが何を求めているのかを調べると、そこから大きなマーケットが見えてくるのは事実だ。どの分野でも質を上げることと並行して、調査を行っていくことも大事じゃないかと思う。

【浅野】

アートツーリズムということか、まさにそのとおりだ。

【伏島委員長】

雪まつりのときに、札幌彫刻美術館ですごくいいイベントがあった。雪像というか、まさに雪のアートだった。これを市役所の前とか公共的な空間でやったら、雪まつりはぐんと盛り上がる。もちろん市民の雪像を否定するものではない。しかしせっかくアートがあるのだから、それをもっと街の中でふくらましたら、もっと雪まつりが変わっていく。陳腐化を防ぐこともできる。

【浅野】

既存の今までの建物がうまく生かされていない。それも含めて、今までも行政の中では言われてきたことだと思う。例えばアーティストの質を上げるための助成金のシステムとかが、有効に作用していない。そこをどう整理しながら行うのかということだと思う。

【伏島委員長】

これからの進め方なのだが、現場の方にゲストに来ていただいたらどうかと思う。例えば、人材育成にかかるアートマネジメントをしっかりとやっている人だとか、アートセンターを既に立ち上げて、がんがんやっているような方、そういう人に来てもらって、現場の話をしてもらう。議論がもっと深くなって広がっていくのではないかと思う。

また、中間に、拡大円卓会議のようなことも行って、我々の議論を発信していけたらとも思う。

次回は、今日の続きを行いたい。委員長として事務局と話しながら、もうすこしテーマを絞った方がよいかなど、調整したい。